数々の刺激的な体験

キンドン・ガンダンガ

Kindon Gandanga
出身地：ジンバブエ・バンケット
所属：産業・国際貿易省主席エコノミスト
日本滞在：2004年8月～2006年3月

来日して一年以上滞在できたことに、私は興奮していた。母国の首都ハラレは、東京から約一万三〇〇〇キロ離れており、国はアフリカ大陸の南にある。話が脇道へ逸れたが、私の滞在は短期のため、文化的相違は問題にならず、即座に解決できると思っていた。私の体験はショックと言えないが、以下を刺激的な体験と呼んでみたい。

母国の人口は一二〇〇万人を超えるくらいで、東京都のそれとほぼ同じであるが、面積（約三九万平方キロ）は日本（約三七万平方キロ）よりもわずかに大きい。そのため私が成田に到着し、新橋で混雑した電車や地下鉄（特に銀座線）に乗車した時の体験は、想像できることだと思う。また新宿駅では、何度も迷ったことは言うまでもない。私が最も驚いたことは、日本人が物静かであったことだ。人々は過密状態の中で、ぶつかったり、靴を踏んだり、押し合っても、お互い何とか礼儀正しくしようと努めている。他の国であれば「おい！俺の足を踏んだな！押すなよ！」といった言葉が多く聞かれるだろう。だが、日本ではそのようなことはなく、人々の謙虚さが感じられる。

次のような出来事は面白かった。レストランでソフトドリンクを注文したが、出てきたのはビールであった（幸いどちらも飲めたが）。スーパーでは、クッキングオイルではなく酢を買ってしまった。私の日本語が、挨拶程度のレヴェルであったためだ。東京駅から快速電車で横浜へ観光に行ったが、一駅間違えたため目的地の駅を通過してしまった。だが今では、駅のアナウンスに注意深く耳を傾け、時刻表も見るようになり、それは良い教訓となった。

私の国では、通りで見知らぬ人とさえ挨拶を交わすが、握手で行うため、日本で私が初めて挨拶をしようとした際には、さすがに驚いてしまった。握手をしようとすると、殆どの相手の方はお辞儀をするのだ。手を差し出すと相手にお辞儀をされるので、とても滑稽に思えた。だが反対に、私がお辞儀をすると頭を下げすぎてしまうため、謝罪に見られることもあった。私の日本人の友人はそれを見て笑ったが、お辞儀の仕方で意味が異なることを教えてくれた。

私は外向的な性格であるので、旅行や観光が好きだ。八月のある日の午後、富士山頂に登ったときのこと。御殿場からバスで須走五合目に行き、人の流れに従いながら山を登った。標高三〇〇〇メートルまで登った後、私は疲れ果ててしまったが、六、七歳の少年が私の横を通り過ぎる時に「頑張って！」と言ってくれた。朦朧とした私の顔がかなり年老いて見えたのか、英語で「もう頂上ですよ」とその父親も言ってくれたため、私は歩みを進め何とか登頂できた。その後下山し、新宿に戻る途中の御殿場で彼らと別れたが、彼らとはすっかり友人のようになっていた。

東京ドームでの日本ハムとバッファローズの野球観戦の際も驚嘆した。対抗チーム双方のファンが、交互に応援を繰り広げるのだ。一方が応援中、もう一方は黙っている。そこではアルコール飲料が売られ、飲酒していた人もいたが。母国でのサッカーの試合（クリケットやテニスに続き、サッカーは人気がある）ではそんなことはない。ファンの目的は、ライバルチームの選手を出来る限りやじり、試合に集中させず、敗北にもっていく。騒音を立て、ヤジを飛ばすため、競技場全体に不快な音がこだまする。まれにビールが服にかけられ、子供に殴られ、さらにヤジが飛ぶのである。このような試合では、（勝てば）全くの他人から、そして見知らぬ女性からでさえ抱きつかれることも、ごく自然なことである。

「日本をもう一度訪れたいか」と聞かれたら、私は「もちろん」と答えるだろう。

（前インターンシップ生／訳＝椙山貴史）